

説教「うなだれる時」

詩篇 42～43 篇 (口語訳聖書)

1973.6.17

日本バプテスト同盟 関東学院教会

今読んでいただいた詩篇は、交読文でもしばしば読まれる、よく親しんでいる詩篇であります。そこには、神を慕ってやまない渴ける魂の姿が鮮明に浮き彫りにされています。昔の人は神への魂の渴きを覚えたが、現代人は全然そんな渴きはないというふうには言えないと思うのです。なぜなら、昔の人は昔なりに、その時代に生きるために様々な困難や苦悩を味わったでしょう。それなら、現代人は苦勞がないかといえば、今日には今日なりの現代人の悩みがあるからであります。物事が調子よく運ばれる時はよいのですが、難しい事態が発生すると、その問題とどう取り組むかということによってその人間のいわば真価が問われるのであります。そうした時に、人は心につる苦しみや嘆きを誰にでも打ち明けることはいたしません。独り思い悩むのが普通であります。これは、その人個人の問題であるからというだけではなく、苦悩する問題が深いからではないでしょうか。しかし、心にしまっておくに耐え難いほどになった時、心の壁を破って外に吐き出される時があります。これを、旧約独特の表現で“魂を注ぎ出す”とといいます。悩める魂はどこに問題の解決を求めているのか、これが現代に生きる者にとっても、そして教会の使命を共に担って苦勞している一人一人にとっても生き残った問題であります。

この詩人がどんな歴史的な状況から歌っているのか、他のほとんどの詩篇がそうであるように、分かっていません。42 篇 6 節に「わたしはヨルダンの地から、またヘルモンから、ミザルの山からあなたを思い起す」と言っておりますから、エルサレムから北の方に離れた地にいたと思われれます。あるいは、バビロン捕囚中に歌ったのかもしれませんが。彼の苦しみ的一端は、3 節に「人々がひねもすわたしに向かって『おまえの神はどこにいるのか』と言いつづける間は、わたしの涙は昼も夜もわたしの食物であった」と表現されています。この詩人の苦悩する魂は個人の経験から発していますが、同時に一個の人間の心の苦悩として、他の人と共通なものを含んでいます。聖書に出てくる実例をとり挙げてこれと関連させてみますと、それは先週も献児式で言及しましたサムエル記の初めに出てくるハンナの場合です。

彼女のライバルの妻ペニンナには子どもがあつたが、彼女にはなかつた。子どもが生まれぬということ自体が女にとって恥とされた時代でしたから、それだけで悲しいことでありました。それに加

えて、彼女を憎く思っていたライバルの妻から、子どもがないことでいじめられたのです。特に、年に一度の秋の収穫祭にシロの神殿で家族がそろって祭りに加わり、飲み食いする家族的な団らんの時に、ハンナがどんな孤独と屈辱と悲しみを味わわされたかは容易に想像できるのであります。彼女の悩みがその極に達したであろうことは、現代とは遠くかけ離れた時代のこととはいえ、痛いほど分かるのであります。ハンナは食事が^{のど}喉に通らなかつた。そして、泣いて食べることをしなかつた。彼女は彼らから離れ、神殿の片隅に座ったまま、心に深く悲しみ、主に祈って激しく泣いたとあります。その時のハンナにとって、この詩人の言葉は文字どおり彼女のものでもあり、「涙は昼も夜もわたしの食物であった」のです。また、ハンナに子どもがないのは神が彼女の胎を閉じて開きたまわなかつたからというわけですから、ライバルがそのことでハンナを悩ました言葉はそのまま、この詩にしばしば出てくる「おまえの神はどこにいるのか」という嘲笑の言葉であったと言えましょう。

私は今、この詩人の苦悩の一端をハンナという一人の妻が直面した苦境から味わい知ろうとしたわけですが。このように人様々に、人生を歩む途上で直面しなければならない幾多の困難や苦悩があります。これとどのように取り組んでゆくべきであるか。そこで、この詩人に注目したいと思います。この詩で繰り返し出てくる言葉に5節の「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか」があり、終わりの11節にもう一度出てきます。また、次の43篇を見ますと、終わりの5節に出てまいります。内容から見ましても、42～43篇は一つの詩篇であったと見て間違いのないようです。そうしますと、全体の段落はこの魂のうめきを表わすこの句でくくられる3つの部分から成っています。そしてよく読むと、第一段落から第二段落、第二段落から第三段落へと進むにつれて、調子が高まっているのに気づきます。第一段落では「かわける魂はいつ行って、神のみ顔を見ることができのだろうか」（42：2）と言いますが、第二段落では「何ゆえ、わたしをお忘れになったのですか」（42：9）となり、第三段落では「なぜ、わたしをお捨てになったのですか」（43：2）と言っております。また、第二段落で「何ゆえ、敵のしえたげによって悲しみ歩くのですか」（42：9）とあるのに対して、第三段落では「なぜ、敵のしえたげによって悲しみ歩き回るのですか」（43：2）と、うろうろと歩き回る悲しみの度が深刻になっています。また、第一段落で「人々がひねもすわたしにむかって『おまえの神はどこにいるのか』と言いつづける」（42：3）とあるのに対して、第二段落では「わたしのあだは骨も砕けるばかりにわたしをののしり」（42：10）との言葉がそれに加わっています。そして第三段落では、「その神を恐れぬ敵を正しく裁いてください。不当な敵の攻撃から、わたしを助け出してください」（43：1）と訴えています。

古代において神々は、私たちが偶像と呼ぶ形で表わされました。人々はそうした形で神々を礼拝し、その神々の顔を見ることができた。そのような時代に目に見えない唯一の神を信じ礼拝することは、祖国が滅亡し異国の地にあった詩人にとって、どんなものだったのでしょうか。異教の人々から「おまえの神はどこにいるのか」と言われるその嘲笑はどんなに激烈なものであったか、想像できないほどです。この激しい攻撃の中で神を慕い求めてやまなかつたのです。しかも、敵の非難の激しが増す

時、詩人は神を慕う思いとは逆に、神から一層遠ざけられるのを感じて、神から忘れられ捨てられたという絶望的な境地に追いやられるのであります。熱い思慕の思いと冷たく捨てられたという絶望的苦境の 2 つの両極に自分の魂が引き裂かれ、もだえ苦しむのであります。「わが魂はうなだれ、わたしのうちに思いみだれる」とあります。思いみだれるとは騒々しい音を立てること、うめき声を出すことの意ですが、それは心が動揺して定まらない不安を意味しています。魂がうなだれ不安であるというこの苦悩は、神を慕いつつ神から遠く突き放されているという深い断絶と矛盾の中にうめく苦しみであります。私たちは、魂のこのような姿をどのようにとらえたらよいのでしょうか。果たして、このような分裂状況の中で生きられ、耐えられるものでしょうか。人はこんな状況に立たされる時、安易に満たされそうな代用品で間に合わせて慰めおくか、あるいはそれとも神などというものにあっさりときよならするかして、この苦痛から自分を解放しようとするかもしれません。

人は安易な道を、平坦な広い道を求めやすく、険しく狭い道を避けたくくなります。しかし、果たしてそれによって、魂の不安から解かれるのでしょうか。思いみだれる魂を、それで鎮めることができるのでしょうか。魂の苦悩を本当に解決できるのでしょうか。この詩人には、それができなかつた。神へのやむにやまれぬ渴望と、神から遠ざけられ^{むな}しく捨てられることの失望感、挫折感。それらの板挟みにうめくほかはなかつた。しかも、この全く対立し矛盾した悩める魂にとって神はいまし給うことを、詩人は告白するのであります。詩人は、言い知れない不安と嘆きの中で神を呼ぶのであります。しかも、いろいろな呼び方をしています。42 篇の 2 節で「わがいける神」と、5 節で「わが助けなる神」、8 節で「わがいのちの神」、9 節で「わが岩なる神」、43 篇の 2 節で「わたしの寄り頼む神」、そして 4 節では「わたしの大いなる喜びの神」と呼んでいます。悩める魂はちょうど、これらの神の呼び名と反対の極に置かれているのです。悲しみ歩く魂が大いなる喜びの神に、捨てられた魂が寄り頼む神に、忘れられた魂が岩なる神に、深い^{ふち}淵と大波に飲み込まれようとする魂が命の神に、うなだれ思いみだれる魂が助けなる神に、渴ききつた魂が生ける神に呼ばわっているのであります。この対立、矛盾、コントラストは、理屈ではどうしても説明できません。神と詩人の魂とは、平板な薄っぺらい関係ではなく、険しくしかしダイナミックな関係にあるのです。絶望の淵に立って、生ける神を慕うのであります。

もう一度、繰り返しの句に立ち戻ってみたいと思います。詩人は言います。「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか」。詩人はこの言葉で、孤独な淋しい^{さび}魂を自分で慰めているのでしょうか。人間の苦悩は自分で慰められる程度でしたら、人はそんなに苦勞はしないでしょう。しかし、それはたとえ慰めてみても一時のことであって、魂の不安を解決することにはなりません。魂の不安は、自分では慰めることができないのです。それを解決するものは、相対の世界を超えた者によらなければなりません。詩人がここで慰めているように感ずるのは、自分で自分の不安をなんとか和らげておこうとする考えからではないのです。「わが魂よ」と自分に向かって呼びかけているのは、実は自分からではなく、自分に向かって呼びかけてくる他からの働きかけによっ

てそうしているのであります。深い絶望と苦悩の中から、自分で自分を慰める力は出てきません。自分で慰められるくらいなら、その悩みや不安はそれほど深刻なものではなかったのでしょうか。42 篇の 8 節を見てもみると、7 節と 9 節が死のおののきと神への嘆きの言葉であるのに対し、それらの間に挟まれて、場違いな感じの句が入れています。いろいろな解釈がされている問題の箇所ですが、この絶望的な句のただ中に、「昼には主はそのいつくしみを与え、夜にはその歌がわたしと共にある。わがいのちの神にささげる祈りがある」と歌われています。主の慈しみと歌が与えられていると告白しているのです。さらに 43 篇の 3 節では、「あなたの光とまこととを送ってわたしを導き、あなたの聖なる山と、あなたの住まれる所にわたしをいたらせてください」と歌っているのです。このように、神と詩人との間に絶望的な深い亀裂、深淵が横たわり、その分裂のうめきの中にあつてどうにもならないところでなえたりうなだれたりし、不安に心安らがない魂に向かって、「わが魂よ、何ゆえそうなのか」と外から語りかけてくださるのであります。ここにおいて、苦悩のどん底で生ける神とつながる道が現われ、ダイナミックな関係が生ずるのであります。

最近、私は北森氏の『日本の心とキリスト教』という書物の中でキリスト教と親鸞聖人の『歎異抄』の対話を試みている一節を読んだのですが、真実の宗教には徹底ということとどんでん返しという 2 つの構造があつて、この二つが深いところで通ずるといふのです。徹底とは普通、積極的な意味に使われるが、底に徹するにはどん底に立つ、一番低い所に立つことである。小説やドラマが最後に逆転劇を演ずるように、否定的などん底に立つ徹底が真実の宗教として積極的な徹底にひるがえる。どん底への徹底がかえって、往生の徹底、救いの徹底という最も積極的なものへと転換する。地獄一定が往生一定にどんでん返しするのだといふのです。親鸞聖人の信仰体験における真実、真理とこの詩人の神を求め悩める魂の真実、真理に触れ合うものがあるのを見る思いがします。「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか」。自ら己が魂に向かって発するようであつて、実は自己を超えた方からの呼びかけ、語りかけであるこの言葉によって、うなだれて不安に心騒ぐ悩める魂が内側から、また背後から押し出される。くずおれた心のどん底から一歩、前へと押し出してくれるのであります。そして、その時、次の言葉が力強く響いてくるのであります。「神を待ち望め！」そしてさらに、「わたしはなお、助けなるわが神、主をほめたたえましょう！」と。この「なお」と訳されている言葉は意味深いと思います。もう駄目だ、絶望だといふどん底に立って、うなだれた魂が望みのないまさにそのただ中であつて、なお神を賛美することをやめないといふことでもあります。絶望の中では、絶望以外はそこには存在しない。その絶望の中で、どうして絶望に耐えることができるでしょうか。それは絶望の中で神を待ち望むといふこと、神をほめたたえることをなお続けるといふこと以外にありません。私たちはここにこそまことの真実があり、まことに神が生きてい給うことを垣間見ることができるのであります。

そして、この真理を最も鮮明に示されたのがイエスの苦難であります。マルコ 14 章 34 節にあるように、ゲッセマネにおいてイエスは恐れおののき、また悩み始めて言われました。「わたしは悲し

みのあまり死ぬほどである」と。また、十字架上の最後の言葉「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ 15：34）という叫びの中に、あの絶望と死の中にあつてそれを突き抜ける生ける神への道が、わがいのちの神への祈りが開けてくるのを知らされるのであります。この時、43 篇の 4 節の言葉が生きてくるのを感じます。「その時わたしは神の祭壇へ行き、わたしの大きな喜びである神へ行きます。神よ、わが神よ、わたしは琴をもってあなたをほめたたえます」

神はこのように、いける神、わが助けなる神、わがいのちの神、わが岩なる神、わが寄り頼む神、わが大いなる喜びの神であるがゆえに、悲しみ、不安、絶望、悩みに心みだれてうなだれる時にもなおわが助けであり、生ける神であり給うのであります。

人それぞれの人生には様々の苦難や困難があり、言うことのできない悩みと悲しみを心に秘めているものですが、この詩人の言葉を通して、神のみ前に己が魂を注ぎ出してうなだれ、みだれる魂の現実を素直に受け入れ認めて、真の平安であり給う神に憩うべく、神を待ち望む信仰をもって歩んでゆきたいものであります。